



編集兼発行
公益財団法人 小笠原協会
東京都港区海岸1-12-2
竹芝客船ターミナル2階
電話 03-3432-4921
FAX 03-3432-4487
振替貯金口座(郵便)
00190-9-64610
みずほ銀行芝支店
普通 3242428

小笠原の農業の歩み

東京都 小笠原支庁
伊藤和彦 産業課長
土屋義和 母島出張所長
東京都 産業労働局
近藤 健 統括課長代理
(前東京都小笠原支庁産業課
課長代理(農業経営指導担当))

小笠原では、亜熱帯性気候の特長を活かした農業が営まれています。明治の開拓時代から始まり、その時々々の社会情勢とともに姿を変えてきた小笠原の農業について、時代を振り返りながら現在の様子まで紹介させていただきます。

小笠原の農業の変遷

明治から大正期にかけて、小笠原の代表的な作物はサトウキビでした。収益性が高かったため現在では山林となっている傾斜地の上まで大規模な農地開発が行われ、製糖組合が組織されるなどサトウキビ栽培の全盛期を迎えました。これに加えて明治後期からはバナナ栽培が急増し、サトウキビと並ぶ品目となりました。小笠原に導入されたバナナは、「小笠原バナナ」と呼ばれる果実が小ぶりで独特の酸味のある品種や、果実が大きい「三尺バナナ」で、今でも島内で栽培されています。しかし、第一次大戦後、サイパン島、テニアン島等が日本の委任統治下になると、南方から内地向けのサト

額の70%以上を占めており、これらはまさに小笠原を代表する農産物です。

パッションフルーツ

ウキビ、バナナが供給されるはじめ、次第に小笠原の栽培は減少していきました。大正から昭和期に入ると冬の野菜出荷が盛んになります。当時は、現在のようなビニールハウスでの加温栽培が普及していない時代です。小笠原の温暖な気候を利用した冬の夏野菜は、内地向けの農産物として非常に重宝され、特にカボチャは小笠原を代表する花形の品目となりました。その後、太平洋戦争による混乱期や、内地でのビニールハウス栽培の普及による小笠原産の夏野菜の価格の下落など、苦難の時代を乗り越えていくことになりました。

昭和50年代になると観葉植物の需要が増大し、小笠原の温暖な気候を活かしたアレカヤシ、ガジュマル、タコノキ等の観葉鉢物生産、切葉類生産が首位になります。しかし、バブル経済の崩壊後には観葉植物全般の需要が低迷したため生産量は減少し、以降は、パッションフルーツを中心とする熱帯果樹類が主役になっていきました。

現在の小笠原の農業

現在、小笠原では農業人口は母島の方が父島に比べて多く、パッションフルーツ、ミニトマト、レモンが主力品目として栽培されています。この3品目で小笠原の農業産出



品評会に出品されたパッションフルーツ



果樹棚に結実するパッションフルーツ

目のうち生産額第1位の代表的な果物となりました。毎年6月に開催されるパッションフルーツ品評会では最高品質の果実が出品されています。

ミニトマト

パッションフルーツに次ぐ品目として、糖度の高いミニトマトが有名です。小笠原では以前からトマト栽培は続けられていましたが、近年、「甘っこ」という品種の人気が高く、小笠原ならではの気候風土と栽培技術の向上により品質を高めてきました。一度食べたファンになる人が続出する甘みと食感が魅力となっています。



人気のミニトマト「甘っこ」

島レモン

「島レモン」の愛称で呼ばれているマイヤーレモンに分類される一風変わったレモンです。果実が緑色の時期に収穫して、その独特でフレッシュな香気を楽しむことが小笠原流の味わい方になっており、島の飲食店では島レモンをお酒で割った「水レモン」が定番メニューです。その他、お菓子、ジャムなどの加工品など多様な用途に利用されており、地域に根付いた特産品です。

これから注目される コーヒー、カカオ

小笠原でコーヒーが栽培された歴史は古く、明治時代か



収穫されたコーヒーの実



チョコレートの原料カカオの実

ら試作されてきた記録が残っていますが、残念ながら戦後の混乱期に栽培が途絶えてしまいました。しかし、近年では栽培を再興する機運が高まっており、非常に珍しい国内産コーヒーとして期待されています。また、内地の製菓会社と母島の農家が協力してカカオ栽培に成功し、2019年には100%母島のカカオ原料を使用したチョコレート「TOKYO CACAO」が販売開始されて好評を博しています。

地域の魅力は農業にあり

その土地の農業は、地元住民にとって故郷の味となり、その地を訪れる観光客にとっては旅の大きな楽しみになります。小笠原ではここで紹介した農産物のほかにも、島の食文化をささえる様々な野菜類や熱帯果樹類などの農業が営まれると同時に、次の時代をみすえた挑戦が続けられています。時代を経て様々な変遷をたどってきた小笠原の農業は、これからも発展しながら島の魅力を発信し続けていきます。

小笠原村での輸血医療体制の取組 第四回 元小笠原村診療所長 笠井あすか

小笠原への血液搬送に 求められること

松崎浩史医師から提示されたのは、「血液を適正管理のもと有効に供給できる体制を目指すこと」であり、これを実現するべく
①赤血球製剤RBC-LR2を5袋、2℃～6℃で保冷する。②庫内温度と扉の開閉記録が取れる。③庫内温度が規定値を外れた場合にはアラームが発報される。④年間を通して気温環境下で搬送することを想定し、マイナス10℃プラス35℃で使用でき。⑤電源がない場所でも5時間以上動作出来る。⑥赤血球製剤RBC-LR2を5袋収納時でも総重量10kg以下とし、人手で容易に運べる。⑦長期間安心して使用できる信頼性・耐久性があること。と非常にレベルの高い仕様が要求されました。

ATR(血液搬送冷蔵庫) の開発と今後への期待

元・富士フイルム富山化学(株)医薬IoTソリューション部搬送装置グループ 都能克博

ATR開発のきっかけ

2012年7月5日に元東京都赤十字血液センター副所長の松崎浩史医師から小笠原に血液製剤を運ぶ血液搬送冷蔵庫の開発をできないかと相談を受けました。

当時、松崎浩史医師は冷蔵庫を作っている家電メーカーに相談したものの技術的に難しいとの理由で断られ、困っていたとの状況でした。

当時の会社では、電子冷蔵庫の冷却システムを製造しており、家電メーカーから当社の紹介がありお声掛け頂くこととなりました。

松崎浩史医師は、小笠原への安全な血液供給の課題に熱意をもって取り組まれており、その思いに揺り動かされ弊社にて装置開発させて頂くこととなりました。

装置開発の工夫

松崎浩史医師の厳しい要求に応えるためには、いろいろな工夫を盛り込む必要がありました。

(1)小型・軽量化と温調性能
重量10kg以下を達成するためには収納血液の重量を考慮してATR本体は8kg以下とすることが必要となります。この条件をクリアするべく、心臓部となる電子冷却システムをゼロベースから見直ししました。最小電力で動作できるように断熱性能の見直しや機器の形状、各部品仕様などを検

(3)追加機能としての航空機積載対応
ATRを使用した小笠原へ



ATR700 外観

の血液搬送を開始した後、元小笠原診療所所長笠井あすか医師のご紹介で都立広尾病院の救命救急の城川医師から、島嶼救急時に防災ヘリや自衛隊機にATRを乗せて血液を携行したいという相談がきました。

ATRを動作させたまま航空機に乗せるには、ATRからの電磁波が航空機に影響を与えないこと、同時に航空機の電磁波でATRが誤動作しないことが必要となります。

このため、ATRが規定値以上の電磁波を発しないよう電子制御部を作り直し、航空機積載適性試験(RTCA DO160E試験)をクリアしました。そして2015年5月に、東京都福祉保健局、東京消防庁のご協力のもと、立川航空隊にてATRのヘリ積載試験を実施して頂き、問題が生じないことを確認しました。

この結果を受け、翌年2016年5月に都立広尾病院にATRが導入され、島嶼救急時のATR血液携行が始まりました。



ATR 防災ヘリ積載試験

ATRを使用した小笠原への血液搬送

以上のような経緯を経て、東京都赤十字血液センターでATRを使用した血液搬送試

験を実施し、ATRで21日間搬送・保管した血液の品質に問題が無いことが確認され、ATRを使用した血液搬送が実現できることとなりました。

2014年4月からATRを使用した小笠原への血液搬送が始まり、搬送実績を積み重ねた後、2014年12月から小笠原ブラッドローテーションの取り組みが始まりました。その後2018年には母島への搬送も開始され現在に至っております。ATRの温調性能や信頼性・耐久性、およびATRを使用したブラッドローテーションの有用性について、この約7年間の実績を通じて証明できたものと確信しています。

ATR活用は今後への期待

小笠原で始まったATRによる血液搬送は、現在全国各地の病院でも活用され始めています。

2020年5月の「第68回日本輸血・細胞治療学会学術総会」では小笠原ブラッドローテーションを含むATRを活用した研究報告が10数件発表されました。

- ① 病院内の手術室やERへの血液供給
- ② DrヘリやDrカーによる血液携行
- ③ 在宅輸血時の血液保管と患者宅への血液携行
- ④ 災害時などを想定したドローンによる血液搬送
- ⑤ 産科クリニックの手術準備血の事前供給など。

これらのATRを活用した発表では、病院内や病院外へ血液製剤を適正に温度管理し提供することで、患者や輸血に係る人たちの安心・安全につながり、また血液の有効利用・廃棄削減にもつながることが報告されました。

そして、都立広尾病院で始まった病院外へATRを使用した血液を携行する取り組みは、DrヘリやDrカーの普及により救急現場への血液携行の取り組み「病院前輸血」へと広がりを見せております。

現在、離島・僻地へのATRを利用したブラッドローテーションは小笠原でしか運用されておりませんが、2018年から始まった厚生労働科学研究の「地域における包括的な輸血管理体制構築に関する研究」において、小笠原ブラッドローテーションを参考にした、条件の異なる離島への血液供給の臨床研究として、長崎・五島列島間や鹿児島・奄美大島間の血液搬送へと取り組みが広がっています。

血液の品質を担保しながら血液を効率よくかつ有効に供給できるATRを使用したブラッドローテーションは、地域における血液供給課題の解決の一助となりえるシステムだと考えております。

今後、取り組みが更に広がり、貴重な血液が有効利用され、多くの方々の安心・安全につながることを期待しております。

最後に、ATRの開発にあたり、人の命を守る血液供給という大切な事業に係わることのできたこと、および皆様より多大なご協力を頂きましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

富士フィルム富士化学(株)は、開発当時(2013年)は(株)CBCエースト、その後2016年8月に富士フィルムグループのセルラー・ダイナミクス・インターナショナル・ジャパン(株)に移行し、2018年10月には合併により現在の名称に変更。

新企画「私と小笠原」第3回

今回の執筆者は小笠原協会の理事である、岡小枝子さんです。昭和一九年七月の引揚などについて寄稿されました。なお、当企画に登場する方々は事務局で人選いたしました。自薦・他薦も大歓迎です。皆さまからの推薦を待ちしております。

「私と小笠原」

小笠原協合理事
岡 小枝子
(旧姓 若澤)



1998年「おがさわら丸」船上にて

私は昭和一九年母島小学校六年の時、引揚第一便で引揚げ、有難いことに昨年元気に米寿を迎えました。これも海山の幸に恵まれた自然が育んで下さった賜物でしょう。

然し小笠原は東京から一千キロ離れた台風の発生地、不便な事も多く、様々な苦勞も多い中、村長さんをはじめ島民の方々が島を愛し、旅行者を温かく迎えて下さる。何時か新聞で「各人を家族のように受け入れ、包み込むぬくもりのある島でした」と言う記事を拝見。娘たちにも語り

ました。数年前娘孫たちも行き、同じ感動を抱いて帰りました。そして、父母・兄弟・姉妹と温かい名の島々。世界唯一の「とても良い島名ね」と語っております。

長兄の話によると、昭和初期は農作物も不作、学校から帰宅すると縁側にカバンを投げ、シヨイコをしょって牛

の草刈り、宿題はしたことがなかったと言う(兄は軍属として島に残り漁業に従事。戦後引揚後も船に乗り船長を目指して独学で船長の資格を取得。パナマ運河も楽に通れる頃遠洋漁業の船長として定年迄働きました)

昭和七年生まれの私達は、最も恵まれた時代の子供だったという。然しこの子達も小学校低学年の頃、測候所建設用の石を頭にかける籠で坂道を運んだり、大敵の害虫、ミカンコミバエを網で取って小遣い稼ぎをしたものでした。(ミカンコミバエは返還後沖縄の先生方が絶滅させたとのこと。素晴らしい貢献)

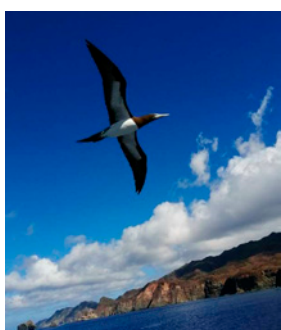
子供達は何より沖港で泳ぐのが楽しく、サメやエイの近づく夕方遊び、カヌーの白帆の近づくのを見て市場に並び魚を買って帰りました。

昭和一五年ころになると生活も一変。電気・水道も整備されました。

実は兄達若者一五人位で二千本(一本二円)の水道管を使って船木山から水道を引くことに成功。正に天の助け、一五・一六歳の智慧と勇氣の賜物でした。

それが功をなして遂に芝園丸に積み切れない程のトマト・キュウリ等を収穫。冬の東京市場を賑わしたとのこと(当時の島の食生活は東京の中流以上だった由)。

お正月は晴着姿で羽根つき大会。男子は大風を揚げてビュンビュン唸らせ、お盆には浴衣や紗の着物に日和傘、長い竹竿に提灯を沢山ぶら下げて墓前で御仏の供養を、今でもその影像が走馬灯のように流れて行きます。然しこの豊かさも三年余り、昭和一九年六月一五日初めて母島が爆撃され、敵機来襲の隙を見て密林に逃げ惑い、七月一日の



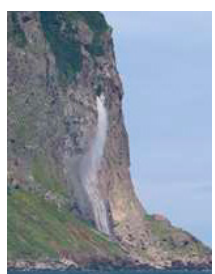
「二度と戦争はあってはならない」小笠原が末永く宝の島でありますように、永遠の平和を祈りつつ、稚拙乍ら記させて頂きました。ありがとうございました。

「北方領土返還要求全国大会」開催される

「北方領土の日」の2月7日、政府及び関係団体は東京・渋谷において、北方領土返還要求全国大会を開催しました。大会は、コロナウイルス感染予防のためオンラインを交えた無観客での開催となりましたが、北海道から沖縄まで全国の代表者がスクリーンに映し出されながら、返還への想いを語り合いました。

来賓として参加した菅総理大臣はビデオメッセージで「これまでの日ロ両国間の諸合意を踏まえ、今後もしも交渉を進めていく」と挨拶しました。

会場スクリーンには、「北方四島を返せ」が映し出され、「北方四島が法的根拠のないまま占拠され続けている」などとするアピールが採



全国大会で紹介のあった、ラッキベツの滝

硫黄島戦没者2遺骨 DNA鑑定で身元判明

1月27日の参議院予算委員会での田村厚生労働大臣の答弁で、遺留品等の手掛かり資料のない硫黄島戦没者2人の遺骨をDNA判定した結果、2人の身元が判明したとの報告がありました。

厚生省では、2013年から遺品の近くで見つかった遺骨などに限りDNA鑑定を実施してきましたが、その後、遺品がない遺骨についても鑑定できるように要件緩和を行いました。

厚生省によると、2人の遺骨は2010年度と2014年度に硫黄島で収集されたもので、その後、遺族のDNA情報と照合した結果、昨年12月に開催された厚生省の専門家会議で2人の身元が確認されました。

硫黄島では1945年の日米軍の激戦で、硫黄島島民で軍に徴用された軍属を含め、日本兵21,900人が戦死しましたが、その後の遺骨収集では約1万柱の遺骨しか収集されておらず、しかも殆どの遺骨の身元が判明していません。

今回のようなDNA鑑定によって、より多くの遺骨の身元が判明しご遺族のもとにお帰りできるよう強く望むものであります。

なお、厚生省では、現在も身元特定のためのDNA鑑定の申請を受け付けているので、鑑定を希望する方は次の申し込み先へ連絡して下さい。厚生労働省社会・援護局事業課鑑定調整室 電話03(35595)2219

小笠原訪問記

小笠原協会事務局より

本年1月に実施した「おがさわら丸乗船特別割引企画」(小笠原協会と小笠原海運の共同での令和2年度小笠原訪問・交流ツアー代替企画)に参加された2名の寄稿を掲載します。

なお、小笠原訪問記の寄稿文を募集いたします。掲載される方は事務局で人選しますが、賛助会員またはそれ以外の方も大歓迎です。

賛助会員 石川 一美

冬、真つ只中の一月。しかもコロナ禍。あまり人に伝えられない状況の中、後ろめたさを少し感じつつ。でも、こんなチャンスは二度と訪れないだろうとの思いで『おがさわら丸』に乗船しました。

24時間の船旅も初めての体験です。こんな長い時間海の上で過ごすなんて耐えられないうちと思いつつ、やっと到着した小笠原父島。

残念ながら空はどんよりとした曇空。それなのに凄く美しい青い海の色。海の色は青空の反射で青く見えると習いましたが嘘だったのか?と思うほどです。でもそれは白い砂も関係しているようでサンゴの砕けた砂浜の白が綺麗な水の青い光を散乱させて鮮やかな青に映るらしい。サラサラした砂は私の知っているものとは全く別物でした。そして驚いたのは周りが海なのに磯の香りがしないと言う事。着いて早々すでに頭の中はいっぱいです。

そんな事をボンヤリ思うのも束の間、ツアーの予定が

次々と用意されていました。

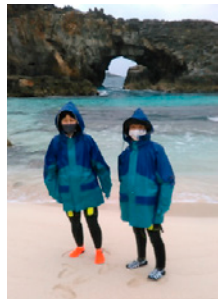
まず午後は戦跡ツアーです。戦争の跡を巡るツアーね!と軽く思ったら大間違い。かなりヘビーなツアーでした。森林の中、ガイドの板長さんの用意してくれている長靴に履き替えて、お茶を渡され、ぬかるんだ山道を歩きはじめました。臨場感溢れる板長さんの話にこの場所で戦いながら過ごした兵士の方々が思い浮かぶようでした。

食糧も少ない過酷な重労働の中、十代二十代の若者たちが何故これほどまでに頑張れたのか不思議でした。そこで板長さんの言葉が印象的でした。『夢があるから夢のために頑張れる』と。夢とは愛する人と共に暮らす事。この任務を無事遂行できれば夢が実現すると言う事ですが、そんな簡単と思う事が難しい時代なのだと感慨深く思い3時間程歩きました。



翌日は海上遊覧の一日コースが用意されていました。一日中はほぼ船に乗ってクジラやイルカを探しに行くらしい。会えるのかしら? 疑心暗鬼とワクワク感で小学4年生の少年のような気持ちになってしまいました。ドリーム号Ⅲに乗り込んで、さあ出発だ! まず南島へ向かいました。上陸できるか分からない難しい島だそうですが無事上陸で

きました。南島を歩いていくと、扇池という何とも美しい場所に着きました。扇池の白い砂浜はヒロベソカタマイマの貝殻が砕けてできたものだそうです。天気が悪いおかげでいつもだったら無い滝も現れて幻想的な景色を見ることもできました。ウミガメの産卵跡の窪みを見ることもできました。



南島「扇池(おうぎいけ)」にて

その後、兄島の海域公園ではたくさん魚に会えました。まるで池の鯉のように色とりどりの魚が群がっていました。昼食後、クジラとイルカを探しに船長が船を移動させます。激しい波は2mを超え

るほどでした。その波間に親子のクジラに会う事ができました。船に迫ってくるクジラ、テイルスラップを発するクジラ等、大迫力で大興奮でした。クロアシアホウドリもゆつたり飛んでいました。イルカには会えませんでしたが大満足のツアーでした。



二見港にかかる虹

旅の思い出はつきません。島に滞在したのは三泊四日ですが朝から晩まで刺激的な時間でした。こんな長い時間のかかる場所には二度と訪れる

ことはないだろうと思っていきましたが『行ってらっしゃい!』と船を見送って頂いた島の人々に『ただいま!』と言って戻れたら素敵だと思いました。そして次回は家族で訪れたいと思います。

賛助会員 齋藤 佐千子

山にも森にも世界的に貴重な沢山の固有種、海には美しい珊瑚や熱帯魚、そして、一年中イルカが泳ぎ、クジラが子育てにやってくる、という日本とは思えない多彩な魅力に溢れた南国の楽園、小笠原。一生に一度は訪れてみたい憧れの島でした。この度は夢叶い胸躍らせての初訪問となりました。

令和三年一月十三日午前十一時小雨の中、父島二見港に予定通り入港。二十四時間の初船旅も波静かでホッとしました。

戦跡ツアーと海上遊覧

ランチを済ませ一時半より戦跡ツアーに参加。どう見ても開戦年生まれとは思えない矍鑠としたガイドの田中善八さん。用意して下さった長靴に履きかえ軍手をはめての三時間半の山中歩き。淀みない熱意のこもった説明と共に、陣地や壕、そしてダイナマイ

トの跡がくつきりと残ったことには驚きました。途中、ホエールウォッチングです。しかし、大波に翻弄される小舟と言った所でしようか、二・五メートルの大波に、クルーザー(ドリーム3号)は、ジェットコースター顔負けの大揺れです。ところが船長さんの巧みな操縦さばきと、ウィットに富んだ掛け声に船酔いもせず沢山のザトウクジラを見ることができました。中には愛らしい母子クジラや大型クジラの豪快なテイルスラップを、50メートル位の近距離で十数回も見ることができ圧巻でした。又、兄島海域公園では、サンゴ礁の周りを群れ泳ぐ熱帯魚をクルーザーの上から透明度抜群のア



トチカや武器庫や弾薬庫を目にしました。こんな山奥に連れてこられた年端も行かない少年兵達は何ほど恐ろしかったことでしょう。時あたかも、核兵器禁止条約が発効された今、戦争という巨悪への怒りと共に、小さな一歩である足元から、不戦の連帯を広げて行かなくては、と心を新たにしました。

母島・北村集落

クアスコープで眺めることができました。残念だったのはウェットスーツを初めて着て、レクチャーも受け、準備万端で臨んだシユノーケリングが、次回のお楽しみになったことです。

三日目は朝一番のゆり丸で母島へ渡り、北村集落を訪問。北村は北港に面した狭い谷間にあり、住宅や村役場、郵便局、駐在所、小学校のほか、クサヤ工場、カツオ節加工工場、漁業倉庫など漁業関係施設も密集し、太平洋戦争により昭和十九年に強制疎開する直前には、約六〇〇人の方々が暮らしていたとの事。当時の写真を目にした時、賑やかな市井の情景が目につくほどで、ここでも平和な生活が奪われたことを実感しました。

二日目は、海上遊覧(一日コース)です。純白の砂浜とエメラルドグリーン海が美しい、世界自然遺産区域の南島。海上不良の為二度目のチャレンジで何とか上陸。本来なら十一月上旬から二月上旬迄は、現地の自然環境の回復保全のため、上陸禁止期間になっているそうですが、今年はおためしと言うことで上陸ができたという、貸し切り状態でもあり、一五〇〇年前の半化石化したヒロベソカタマイマイなども観察できとても感激しました。途中二〇一九年の台風二一〇号の被害で未だに芽が出ない固有種もあり、甚大さを物語っていました。

いよいよ待ちに待ったホエールウォッチングです。しかし、大波に翻弄される小舟と言った所でしようか、二・五メートルの大波に、クルーザー(ドリーム3号)は、ジェットコースター顔負けの大揺れです。ところが船長さんの巧みな操縦さばきと、ウィットに富んだ掛け声に船酔いもせず沢山のザトウクジラを見ることができました。中には愛らしい母子クジラや大型クジラの豪快なテイルスラップを、50メートル位の近距離で十数回も見ることができ圧巻でした。又、兄島海域公園では、サンゴ礁の周りを群れ泳ぐ熱帯魚をクルーザーの上から透明度抜群のア



島内観光

四日目あつと言う間の最終日は、半日島内観光です。ワゴン車で三日月山展望台や国立天文台そして、境浦海岸で米軍の攻撃をうけ座礁したままの濱江丸等を駆け足で見回り、最後は小笠原海洋センターでアオウミガメや、ザトウクジラの調査、保全活動を学び、アオウミガメにキャベツのエサやり体験をしました。



2021年度 小笠原訪問・交流ツアー
本年、小笠原村・小笠原海運と協力して、第21回小笠原訪問・交流ツアーの実施を予定しております。
実施期間は10月29日(金)竹芝発から11月3日(水)竹芝着までを予定しています。
昨年は新型コロナウイルス感染症の状況から残念ながら中止せざるを得ない状況でした。
本年の開催については新型コロナウイルスの感染状況を勘案して実施の可否を決定いたします。

今年のツアー実施可否を含め詳細につきましては、ホームページでお知らせするとともに、次号機関紙に掲載しますので、宜しく願います。

「おがさわら丸」ドック入り「さるび丸」が代替運航

本年5月10日(月)から5月27日(木)まで「おがさわら丸」がドック入りします。

その間の5月18日(火)竹芝発から5月21日(金)竹芝着までの1運航を「さるび丸」が代替運航します。

なお、「さるび丸」は三代目で昨年6月25日から運行開始しました。運航時間等の詳細につきましては「小笠原海運」のホームページをご参照ください。



さるび丸

